説教20200920テモテへの手紙 二　１：１‐７ 21-153　　356　　Ⅱ192

説教　「再び火をともして」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

マタイ福音書にある毒麦のたとえにあるように、麦の中には毒麦が混在しているのが世の常であります。しかし、その毒麦を取り除くのは私たち人間の業ではありませんし、その前に、私たちには何が悪かということも、はっきりとは見定めることは出来ないかもしれません。

二つのことが混在している、まじりあっている、ということでは、先週お話した、神の国と、この世の国の混在ということも似たような面があるでしょう。このアウグスティヌスが説きました、神の国と地上の国との混在説というのは、一つのいわば定説でありまして、神学校の教科書などにも必ず取り上げられています。だから牧師ならみんな知識として知っているんですが、その混在の中を実際に歩んでいくのは、忍耐と苦しみがともなうものです。アウグスティヌス自身もこの混沌の中を歩んだ人物でした。彼はローマカトリック教会では聖人扱いされていますが、その青年時代は悪いこともする、普通の人間でした。普通といってもその悪さの程度はかなりやばかったといえるでしょう。彼はその著書『告白』の中で次のように述懐しています。「私を喜ばせたのはただ「愛し愛されること」だけ、しかし私は清い友情の範囲内に、魂の節度を保つことが出来ず、泥のような肉欲と泡立つ青春から立ち込めたもやで、心はかすみ、暗くなり遂には、明るい愛と、暗い情欲との区別がつかなくなりました。」更に、彼は仲間と共に窃盗も働きました。「私は盗もうと思い、実際盗みましたが、決して困窮していたわけではなく、それは正義の欠乏と嫌悪、不義の充満によることでした。」

彼のこの述懐を聞いてると、その青年期の姿は、今の世の中でも普通に見出せる悩み多き青年たちの姿に重なります。

アウグスティヌスのお母さんはモニカと言って、キリスト者でありましたが、悪いことをするアウグスティヌスを祈りによって必死に支えていました。しかし父親は、この世で偉くなれ、この世の栄誉を追い求めなさいと説く典型的な親でした。

この家族は、今から１６００年くらい前に、地上を歩みましたが、このようにキリスト者の歩みは今も昔も変わらないところがあります。

さて、神の国と地上の国の混在ということをもう少し詳しく言い表してみますと、それはグラデーションという言葉で説明出来るかも知れません。グラデーションというのは一方に明るい白があり、その対極に暗い黒があって、その間には、だんだん暗くなっていく灰色が段階的に位置します。私たちのこの地上の歩みは、その段階的な灰色の領域を歩んでいるようなものだといえるかもしれません。

今日からテモテへの手紙２に入りますが、この手紙と、先週までのフィリピの信徒たちへの手紙とは、同時期に書かれたという説があります。この説はうなずける説で信じてよいかもしれません。ただ両者がはっきり違うのは、フィリピの信徒たちへの手紙はパウロとテモテが連名で書いたものであり、テモテへの手紙は、その名の通りパウロがテモテへ宛てて書いたものです。パウロはテモテに宛てて、夜も昼も祈って絶えずテモテを思い起こしつつ、この手紙を書いたのでした。

今日の聖書箇所の登場人物は、パウロ、テモテ、そしてテモテの母エウニケ、そして祖母ロイスです。この母系家族はユダヤ人でしたが、みなキリスト者となりました。当時、キリスト教はユダヤ教からそんなにはっきりと分かれてはおらず、世の中から見ればキリスト者はユダヤ教の中の一派のように思われていたかも知れません。いわば、彼ら彼女らはキリスト教とユダヤ教という両極の間のグラデーションの中を歩まされていました。ただパウロの意識の中ではユダヤ教とキリスト教とは同じものという認識だったと思います。但し、ユダヤ教にはかたくなで、悪いところが多くあるので、その悪い部分からキリスト教を区別するために、彼は、３節では「清い良心をもって」ですとか、５節では「純真な信仰」といったような形容詞を用いて、いわゆるキリスト教を言い表そうとしています。実は３節は日本語訳が分かりにくくなっていますが、ここの「先祖にならい」というのは分かりやすく訳せば「先祖伝来の」という意味です。新しい聖書協会共同訳ではそのように訳されています。つまりここでパウロが言う「仕えている神」「先祖伝来の仕えている神」というのは、まぎれもなく、アブラハム、イサク、ヤコブの神のことです。パウロは、彼自身ファリサイ派であった時から変わることなく、キリスト者になった今も、一つのアブラハム、イサク、ヤコブの神にお仕えしその神に感謝を奉げているのです。しかし、そのような古くからの信仰を守りつつも、彼は「清い良心をもって」とわざわざ言明して、自らの信仰の純真さを表現しようとしているようです。今の私たちキリスト者にとっても

そうですが、パウロにとりましても、その先祖伝来の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神というのは主なる神のことでありまして、私たちの拠り所です。ややもすると私たちキリスト者にとって、アブラハム、イサク、ヤコブの神のことは、遠いかなたに追いやられているのではないでしょうか。しかし、主なる神がわざわざこの三人の実名を挙げて御自身を名乗られたのには訳がありまして、それだけ、信仰というのが家族の間で継承されていくべきことであることを指し示しているのです。今に置き換えて言えば、例えば、さよ、絹代、純子の神というようになるでしょうか。

このようにパウロは、信仰が先祖伝来の血のつながりによっても継承されることを、清い良心をもって信じておりました。

一方、先祖伝来の信仰と対極にあることについても、パウロは言及しています。それは６節「そういう訳で、私が手を置いたことによってあなたに与えられている神の賜物を、再び燃え立たせるように勧めます」という箇所に示されています。手を置くというのは大切な儀式で、例えば、私たちが洗礼を受けた時に、牧師は私たちの頭に手を置きますが、それによって神の賜物である信仰が継承されるということです。

私たちはこの先祖伝来の信仰と、手を置かれたことによる信仰を両極とするその間のグラデーションの領域を歩まされています。その歩みには自ずと忍耐や苦しみが付いて回るものです。例えば、アウグスティヌスの母モニカの心境はどうだったでしょうか。息子のアウグスティヌスは女性との情欲に溺れ、仲間と巷で盗みを働いている、父親の配慮もなく、彼女はただ、主イエス様に、息子のことを祈っていたのではないでしょうか。これがユダヤ教のように物理的に割礼を受けることで、救いの道に入れられるというのなら、この方が楽に決まっています。しかしパウロもそうですが私たちキリスト者は主イエス様の面前で許され、救いの道へと歩まされるのです。その選びの中で、必要な忍耐、練達、そして希望が育っていくのです。アウグスティヌスの『告白』によりますと、母モニカは次のような切実な祈りを捧げておりました。「私は夫に従います。しかし神よ彼よりむしろあなたが息子の父となって下さい。」

何という苦しい祈りでしょうか、しかし御心にかなう願いは裏切られることがありません。後年アウグスティヌスは、打ち砕かれて青年時代の悪行を悔い改めて洗礼を受け、悪を善に変えてくださる神の御力によって、多くの善い業を成すことが出来たのでした。

又パウロ自身も、苦難の道を歩んできました。ダマスコ途上で主イエス様御自身が現れ、彼が先祖伝来の神と拝んでいたその神が実は主イエス様ご自身であったことを知らされた時の、パウロが受けた驚愕はいかばかりのものだったでありましょう。そのようなパウロが「主イエスの恵みによって、私たちは救われるのだ」というのには真実味があり信憑性があります。しかし、もし仮にそのような苦難の過程を抜きにして、「洗礼を受け、教会に属せば、あなたは救われます」といったような伝道では、その実は実っていかなないのではないでしょうか。

グラデーションの中を歩まされる私たちには、涙と喜びとが入れ替わり訪れるでしょう。それは、私たちがこの地上を去る時まで続きます。晩年にこのテモテへの手紙を書いたパウロも数年後にはこの地上を去ったことでありましょうが、このパウロそして長年行動を共にしたテモテたちもまた、最後までその涙と喜びの日々を過ごしていたのです。

そのキリスト者の喜びに満たされるということについてはフィリピの信徒たちへの手紙のコウカイで詳しくみて来ましたが、実は、そのような喜びの生活を続けていくのには、私たちは神からの賜物を、再び燃え上がらせねばなりません。６節に記されていますが、再び燃え上がらせる、というのは、激しさを感じさせますが、直訳ではもっと静かなことを言っています。「再び火をともす」という方がふさわしいと思います。、炎が消えてしまって真っ暗になった処に、又手を差し伸べて、そっと小さな火をともす。こんな情景です。私たちに与えられている信仰は大きいですが、私たちは、その大きさに気おされて直ぐそれを投げ出してしまうのではないでしょうか。ですから私たちはお互いの信仰を励まし合いながら、手を差し伸べて、その信仰に再び火をともすということが、しょっちゅう必要になってきます。

７節に神は、臆病の霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊を私たちに下さったのです。とありますが、わたしたちが互いの信仰を再点灯させるために必要なのは、力と愛と思慮分別の霊です。このように言いますとカッコよくて何だかわかった風になりますが、実は分かってないということも往々にしてあるでしょう。これを説明するには、ここでその対極にあるものとして示されている臆病の霊についてみていくのが分かりやすいかと思われます。私たちに必要なのは臆病の霊ではない。臆病であってはならないといわれます。しかし臆病という言葉も単独では様々に解釈出来ます。臆病とは、用心深さであり、慎重さであるので、必要なことである、ともいえます。それもそうだなーと思えるでしょう。

しかしマタイによる福音書２５章にあるたとえ話は臆病にまつわる罪を端的に語っています、主人からタラントンを預けられた僕の独りが、臆病ゆえに、それを地中に隠してしまったという話です。この地中にタラントンを埋めた僕には、力も、愛も、思慮分別もありませんでした。そんなみじめな状況をこの臆病の霊はもたらすのです。いかがでしょか、私たちは、臆病の霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊を下さった主イエス様に感謝と賛美を捧げたくなるでしょう。

私たちはその喜ばしい霊を下さった主イエス様を賛美しつつ、お互いの信仰にまた、火をともしつつ、共にこの地上を歩んで参りたいと願います。

お祈りいたします

天の父よ、今日は御前にこの兄弟姉妹を集めて下さり、共にあなたを礼拝賛美出来ます幸に感謝いたします。

主よあなたはわたしたちに臆病の霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊を下さいました。感謝します。私たちがその霊に生かされ、信仰の道を大胆に歩んでいくことが出来ますように。しかしこの世の悪の力と戦うのに疲れ、私たちはしばしば消え入りそうに弱くなります。どうか私たちに再び火をともし、あなたからの賜物を再び燃えたたせてください。

それによって、隣人を励ましていくことが出来ますように。

病と闘っておられる方、孤独を感じて暮らしておられる方を、あなたが励まして下さい。

父と聖霊と共に一体であって世々に生き支配しておられます私たちの救い主イエスキリストのみ名によって祈ります。